

2016年
10月26日
水曜日

中川 慎二 教授（ドイツ語教育、異文化間コミュニケーション）

「釜ヶ崎のストロームやつと」

「西独から婦人宣教師來日、不幸な夜の女たちを救いたい」
（一九五三年十一月読売新聞）と報道されたのは戦後の復興期である。

婦人宣教師とディアコネス（Diakonie、プロテスタントの宗教社会奉仕運動）からの派遣女性五名、合計六名が十一月十五日午後四時大阪商船あとらす丸で來日した。

この婦人宣教師が Elisabeth Strohmann で、エルズベト・シュトロームと書くのが正しい。エリザベトは同じ名前の変種である。日本基督教団の招きで來日した。賀川豊彦の招きともいわれる。ちなみに、賀川豊彦（一八八八—一九六〇）は神戸に生まれ徳島に育ち、神戸でキリスト教の伝道をはじめ、労働運動、社会福祉、農民運動、消費組合運動をおこなった牧師であり社会運動家である。賀川は一九四九年にはヨーロッパに

渡り伝道を行っている。ストロームさんたちは、ブレーメン港から横浜港に到着した。彼女は三年余り東京で活動を模索するが、甲府での奉仕を経て、十年経った一九六一年全国を見て回り、釜ヶ崎に出会う。

一九六四年には家を購入し子供をあずかり始め、一九六五年には家庭保育を始めた。それ以来二十年間彼女は釜ヶ崎で社会奉仕活動を教会と共にはじめ、教会のためではなく人々のために働いた。西成ベビーセンター（現在は、「ストローム記念山王こどもセンター」として受け継がれている。）や断酒会「むすび会」（現在の釜ヶ崎ディアコニアセンター「希望の家」のことで、アルコール依存症の人たちの社会復帰のためのプログラムを実施している。）を立ち上げた。彼女はもとドイツではミッドナイト・ミッション

（Midnight Mission）の活動で、売春婦、元受刑者などの社会復帰の仕事をしていた。その彼女が、日本にやってきた。そして、退職のため帰国したのが一九八三年（昭和五八年）で、來日からすでに三〇年が経っていた。

私がストロームさんに出会ったのは二〇一六年八月二十三日南ドイツの小さな町でのこと。私はこのところ月一回程度で釜ヶ崎の夜回りに参加している。野宿者ネットワークが毎週土曜日に行っている夜回り、ふるさととの家に集合し、代表の生田武志さん（『釜ヶ崎から 貧困と野宿の日本』筑摩書房の著者）らが中心になって支えている活動である。大阪市内を三ルート（本町―難波、天王寺、山王）に分けて土曜日夜に巡回し、野宿者に声をかけながら必要な支援をしている。野宿者は若者

たちの襲撃の対象になることもあり、被害がないかも聞いて回る。この夜回りは、月に一回山王こどもセンターのこども夜回りに合流している。このこども夜回りで山王こどもセンターに行ったことがきっかけだった。看板に、ストローム記念とあった。聞いてみるとドイツ人だという。そして、彼女がまだご存命で、南ドイツのヴュルツブルクにほど近い小さな町に住んでおられるというので、お訪ねした。九十四歳になる彼女は「私はこどもが好きだったわけではないのよ」と私の期待を大きく裏切りながら、五時間にわたるインタビューが始まった。帰り際には、彼女の部屋の前から窓越しに手を振ってくれた。メイン川を望む小さな町での一日であった。